史生尾張少咋を教へ喩す歌一首　并せて短歌

四一〇六番

大汝　少彦名の　神代より　言ひ継ぎけらく
父母を　見れば貴く　妻子見れば　かなしくめぐ
し　うつせみの　世の理と　かくさまに　言ひけ
るものを　世の人の　立つる言立て　ちさの花
咲ける盛りに　はしきよし　その妻の児と　朝夕
に　笑みみ笑まずも　うち嘆き　語りけまくは
とこしへに　かくしもあらめや　天地の　神言寄
せて　春花の　盛りもあらむと　待たしけむ　時
の盛りそ　離れ居て　嘆かす妹が　いつしかも
使ひの来むと　待たすらむ　心さぶしく　南風
吹き　雪消溢りて　射水川　流る水沫の　寄るへ
なみ　左夫流その児に　紐の緒の　いつがりあひ
て　にほ鳥の　二人並び居　奈呉の海の　奥を深め
て　さどはせる　君が心の　すべもすべなさ